

石川県立美術館だより

第469号 令和4年11月1日発行

BIJUTSUKAN
DAYORI

第69回 日本伝統工芸展 金沢展

加賀藩の美術工芸【前田育徳会尊經閣文庫分館】

高松宮記念賞《蒔絵箱「凜花」》田中義光（石川）
—「第69回 日本伝統工芸展金沢展」より—

■ 石川の文化財 一国宝・重文・県文・市文—【古美術】

■ 優品選【近現代工芸】

■ Voyage 一海外を旅する—【近現代絵画】

■ 画家の版画【版画】

■ 優品選【近現代絵画・彫刻】

- 10月の企画展示室
- 学芸室の人々
- 11月の行事予定
- アラカルト ただいま展示中

企画展(第7～9展示室)

第69回 日本伝統工芸展 金沢展

主催／石川県教育委員会、日本放送協会金沢放送局、朝日新聞社、北國新聞社、公益財団法人 日本工芸会
後援／富山県教育委員会、福井県教育委員会

10月28日(金)～11月6日(日) 会期中無休

◆観覧料

	個人	団体 (20名以上)
一般	700円	600円
大学生	400円	300円
高校生以下	無料	

※当館友の会と65歳以上は団体料金

我が国には、世界に卓絶する工芸の伝統があります。

伝統は、生きて流れているもので、永遠にかわらない本質を持ちながら、一瞬もとどまることのないのが本来の姿であります。

伝統工芸は、単に古いものを模倣し、従来の技法を墨守することだけではありません。伝統こそ工芸の基礎になるもので、これをしっかりと把握し、父祖から受けついで優れた技術を一層錬磨することともに、今日の生活に即した新しいものを築き上げることが、我々に課せられた責務であると信じます。

昭和二十五年、文化財保護法が施行され、歴史上、若しくは芸術上特に価値の高い工芸技術を、国として保護育成することになりました。その趣旨にそって、昭和二十九年以来、陶芸、染織、漆芸、金工、木竹工、人形、諸工芸の七部門にわたり、日本伝統工芸展が開催されてきました。

金沢への巡回展は昭和三十八年の第十回展から始まり、以降は毎年開催されています。今回は全入選作品五五五点の内から、重要無形文化財保持者(人間国宝)や受賞者らの秀作に加え、地元北陸の作家を中心とした入選作品三一二点を展示します。

日本工芸会総裁賞

《透網代花籠「朝露」》河野祥肇(大分)

文部科学大臣賞

《備前白泥混消花器》隠崎隆一(岡山)

朝日新聞社賞

《吹分盤》般若泰樹(富山)

■記念講演会

日時…10月30日(日)13時30分

演題・講師…

「木と生きる」川北良造氏(重要無形文化財「木工芸」保持者)

「本流を歩む」前 史雄氏(重要無形文化財「沈金」保持者)

会場…美術館ホール(聴講無料)

お問合せ…日本伝統工芸展金沢展実行委員会事務局(県文化財課内)

TEL 076-225-1841

事前申込制(メール・FAXのみ)締切…10月21日(水)

氏名(よみがな)、住所、電話番号、メールアドレスまたはFAX番号を記載の上、メール(bunkazai@prefishikawa.lg.jp)またはFAX(076-225-1843)まで。申込多数の場合は抽選となります。結果はメールまたはFAXでお知らせします。

当日お席に空きがあれば、聴講可能です。

◆展示作品解説

日時	11時から	13時30分から
10月29日(土)	《染 織》毎田健治	《漆 芸》山岸一男
30日(日)	《金 工》般若 保	記念講演会
31日(月)	《陶 芸》吉田幸央	《木竹工》土本内浦
11月1日(火)	《金 工》村上浩堂	《染 織》山下郁子
2日(水)	《陶 芸》田島正仁	《木竹工》佐竹巧成
3日(木・祝)	《木竹工》中嶋武仁	《漆 芸》寺西松太
4日(金)	《染 織》二塚長生	《陶 芸》中田一於
5日(土)	《金 工》中川 衛	《人 形》高田和司
6日(日)	《漆 芸》林 暁	《総 合》山崎 剛 (金沢美術工芸大学学長)

古美術(第2展示室)

石川県の文化財 —国宝・重文・県文・市文—

10月28日(金)~12月11日(日) 会期中無休

前田育徳会尊經閣文庫分館

加賀藩の美術工芸

10月28日(金)~12月11日(日) 会期中無休

重要文化財の伝周文《四季山水図》を中心に、前田育徳会が所蔵する絵画と工芸作品を紹介する特集展示です。今回は重要文化財の黙庵霊淵の《四睡図》を特別に展示します。

黙庵霊淵は、室町時代の末期から南北朝時代に活躍した、日本における初期水墨画を代表する絵師です。中国へ渡り、その地で没したため、中国の絵師と解されていました。描かれるのは、中国唐代の禅僧・豊干が、自身が乗り物としていた虎を抱き、弟子の寒山拾得とともに深い眠りにつく様子で、祥符紹密という禅僧と思われる人物による賛文が記されています。「眠り」とは無我の境地に等しく、厳しい寒さの中

にある老樹のように、大きな夢を見ていると記されています。

工芸作品では、前田家が収集した書籍典籍を納めた外箱を3点紹介します。『職人歌合』を納めた《蓮蔀絵箱》、『唐物語集』を納めた《貝蔀絵箱》、『兼好家集稿本』を納めた《秋草蔀絵箱》です。収集した書物に専用の外箱を整えて大切に保管していたことがうかがえます。同時代につくられた硯箱・香道具などの漆芸作品とともに鑑賞ください。

本特集ではその他、岸駒《松下飲虎図》、伝二代五十嵐道甫《黒塗布目引出絵替絵具筆筒》、《青貝敬字筆筒》も紹介します。

今秋、東京国立博物館創立一五〇年を記念して、

「国宝 東京国立博物館のすべて」展が開催されています。東京国立博物館が所蔵する八九件の国宝すべてが展示されるとあって、大変な人気を博しています。美術への関心があまり高くない方でも、「国宝」と聞くと俄然興味がわいてくるのではないのでしょうか。

さて、毎秋恒例の展示である「石川の文化財」は、石川県にある二つの国宝《色絵雉香炉》と《剣 銘吉光》がどちらもご覧いただける機会です。本展示は文化庁が定める「文化財保護強調週間」(毎年十一月一日から七日までの一週間)にあわせて開催され、他にも重要文化財をはじめとする県内の貴重な文化財を一

挙に鑑賞することができます。

本展では、初夏のコレクション展に引き続き、三振の刀剣を展示いたします。今回展示する石川県指定文化財《刀 銘賀州住兼若》は三代・辻村兼若の代表作と称される名品です。「霊護／寛政庚申仲冬十七／支禦危難子孫宝焉／雅楽助岸駒識」という裏銘より、加賀藩ゆかりの絵師岸駒^{がんく}が所持したことが知られます。

そのほか《山家心中集》、《古今和歌集 清輔本》、《天狗草紙 園城寺巻》(すべて重要文化財)や、季節にあわせて石川県指定文化財《秋草図》喜多川相説も展示します。貴重な文化財の数々をぜひお楽しみください。



石川県指定文化財《刀 銘賀州住兼若》三代辻村兼若

重要文化財《四睡図》黙庵
前田育徳会蔵

油彩画(第3展示室)

Voyage

—海外を旅する—

10月28日(金)~12月11日(日) 会期中無休

近代以降、多くの画家がそれぞれの役割や期待を胸に海外へと旅立ちました。

明治初期は、藩や政府の命により法律や政治学の勉強のために欧米に渡った国沢新九郎らが、職務の傍ら西洋画を学び、技術や資料を移入しました。その後欧米から招聘された専門家による洋画教育が行われ、それに飽き足らない者たちが現地に学ぶべく留学します。各国で異なる流派を学んだ山本芳翠や松岡寿、黒田清輝らは、明治二十年代に相次いで帰国し、明治中期以降の展開に大きな役割を果たしました。明治末から大正期には、新帰朝者らがポスト印象派など西洋の新たな芸術思潮をもたらし、洋画の成熟を促します。

石川ゆかりの画家たちも海外に渡っています。佐々木三六が最も早く、山本や松岡ら洋画留学の第一世代と同時期にイタリアに留学、後に石川県に図画教師として赴任し、石川洋画壇の基礎を築きました。その後、宮本三郎や高光一也がフランスで多くを学び、独自の画風を展開させ、後進を育てています。鴨居玲は、第二の故郷として愛したスペインで、数々の傑作を生みだしました。その他アジアやアメリカなど様々な国を旅した画家たちが、現地で影響を受けた作品を制作しています。

本展示では、画家たちの想いや海外旅行気分を味わっていただけると幸いです。



高光一也《サクレクール寺院》

近現代工芸(第5展示室)

優品選

10月28日(金)~12月11日(日) 会期中無休

工芸分野の展示は、企画展示室で開催の「第六十九回日本伝統工芸展」に合わせて、日本工芸会に所属する作家を中心に取り上げています。

例えば、陶芸では釉裏銀彩の中田一於、彩釉磁器の田島正仁、金襴手の吉田幸央など、現在も独自の表現を追求するベテラン勢から、「雪霰」を斬新なデザインで表現する南絢子、洒脱なタッチで動物を描く山近泰など、実力のある中堅の作家まで紹介します。

今回は、重要無形文化財「釉裏金彩」保持者の吉田美統《釉裏金彩更紗文壺》について見ていきましょう。吉田の「釉裏金彩」は、独自の地色の釉薬を施した上に、厚さの異なる金箔を施し、低火度釉薬を掛けて焼成する技法で、金彩の上品な輝きを引き出しています。

まず。作品の形状により、箔での表現方法に違いがあります。平鉢の場合は、植物や鳥などを主題とし、植物の周りを鳥が飛んでいるような、絵画的な構図となっています。今回の展示作品のような壺や花生の場合は、器形に合わせて、デザイン化された植物を上下方向に施すような、装飾的な表現となっています。文様に共通するのは具象的な表現の追求であり、ここに吉田の制作に対する強いこだわりを感じることができます。

最後になりましたが、本展では、昨年度新収蔵になった二代伊藤伊斎《利休好茶箱》も紹介しています。桜を白雲に、紅葉を錦織に見立てた雲錦文様が木村雨山により施された上品な茶箱です。



吉田美統《釉裏金彩更紗文壺》

優品選

10月28日(金)～12月11日(日) 会期中無休

日本画分野のテーマは晩秋です。深まり行く秋を謳った下村正一《秋》をご紹介します。本作は京都市立美術工芸学校の卒業制作です。二頭の狐が野を駆ける牧歌的な雰囲気は、師である堂本印象の当時の作風を受容し、卓抜した技量も感じさせます。ほかに彩り豊かな紺谷光俊《龍田姫之図》、白山の植生にも精通した玉井敬泉の《山の秋》など、季節の優品をご覧ください。

油彩画分野から、ベニスの建物を描いた二作品を紹介します。村田省蔵《古い館》は、赤紫の壁と紺の窓扉が印象的な建物を描きます。ムラーノ島に取材した作品で、村田は「美しい壁の色に魅力を感じた」といいます。壁や窓の塗装が剥がれ落ち、古い建物であ

るとわかりますが、窓辺には鉢植えの赤い花が飾られており、住人が丁寧な暮らしを送っている様子が想像されます。脇田和《窓(ベニス)》でも、村田作品と同様に赤紫の壁を描いています。脇田もこの壁の色に惹かれたのかもしれませんが。

彫刻分野では、当館所蔵の小品を展示いたします。等身大もしくはそれ以上の「大作」でなくとも、力量ある作家の造形力はしっかりと宿ります。彫刻家によるレリーフ作品、大作をつくる際のマケット(小型のひながた)、リアルさが際立つ動物彫刻、吉田三郎が晩年に楽しんで制作した友人の頭像などをご紹介する予定です。ちいさな傑作たちをお楽しみください。



紺谷光俊《龍田姫之図》

画家の版画

10月28日(金)～12月11日(日) 会期中無休

日本の近代から現代にかけての版画は、伝統的浮世絵とは別の芸術を目指し、創作版画を主張する版画家たちによってすすめられてきました。創作版画の目指す所は、職人との分業による浮世絵版画とは異なり、画家自身による個性的な版画をつくること、また、版画でしかできない効果の絵をつくることでした。そのため作品を制作する際は、自画・自刻・自摺であることを基本としてきたのです。

第二次大戦前後からは、フランスなど欧米から帰朝した画家たちや留学した画家たちによって、版画が独立した表現形式であることや、自己のスタイルを確立した多くの画家が本格的な版画制作を展開していることが伝えられました。一九五〇年代になると国際版画展への日本の版画家たちの活躍や東京

国際版画展の開催で国際交流が急速に進み、版画は日本でようやく美術としての価値が認められたのです。これまでの版画家以外の画家による版画制作も多くなり、版画が一般に浸透するにつれて市場が拡大し、自画・自刻・自摺のみでは対応が難しくなりました。そして、版画を摺ることを専門とする版画工房が出現し、特にリトグラフ、シルクスクリーン、銅版画などの印刷工房が急速に発展しました。それによって版画専門家ではない、絵画作品によって現代美術の動向を牽引してきた画家たちによる版画作品も続々と世に出ることになったのです。そのことはそれぞれの版表現の多様性をもたらし、版画によって現代美術そのものの表現領域を拡大させていったのでした。



碓伊之助《陶工》

第7・8・9展示室
第31回
北國水墨画展

11月16日(水)～20日(日) 会期中無休

石川県内の水墨画愛好団体を網羅した統一展です。県水墨画界の結束を図るとともに、愛好者拡大を目指すねらいの展覧会で、作品は広く愛好者から公募して審査します。入選、入賞作に委嘱作品も併せて展示し、水墨画の魅力を伝えるものです。

◇入場料 一般・高大生：五〇〇円(四〇〇円)
()内は前売料金 中学生以下無料

◇連絡先 金沢市南町二番一号
石川県水墨画連盟(北國新聞社事業局内)
電話：076-260-3581

第8・9展示室
第31回
石川独立DO展

11月10日(木)～13日(日) 会期中無休

石川独立は、昭和五十四年に県内在住の独立展出品者を中心にDO展として発足しました。日本のフォービズム(野獣派)の流れを汲む独立展は、東京・国立新美術館で毎年開催されており、今年で八十九回を数えます。自由で個性強烈な作家を輩出している事で注目を集めています。

十二日には批評会も行い、作家それぞれの作品に対する思いが理解できる機会ともなっています。一般の方からのご質問やご意見を伺うこともできますので、是非ご参加ください。

◇出品予定作家
伊藤裕貴・岩永純・大部雅子・乙部久子・桑野幾子・桜井節子・進地美穂・田井淳・南雲まき・舟橋清・堀一浩・堀田正人・松村裕之・安野弘美

◇入場無料

◇連絡先 堀一浩
電話：090-4326-5849

第7・8・9展示室
75周年記念
示現会金沢展

11月23日(水・祝)～27日(日) 会期中無休

一般社団法人示現会は、具象絵画を目指して昭和二十二年に石川虎二らにより創立しました。その後、大内田茂二、橋原健三の両名の芸術院会員を輩出しています。

今年の金沢展では、今春に国立新美術館で展示された七十九点と石川県支部長推薦三点の作品を展示します。

今年から、できるだけ多くの方にご高覧頂たく、観覧無料といたしました。

是非ご観覧くださいますよう案内させて頂きます。

◇入場無料

◇連絡先 一般社団法人示現会石川県支部長
松本隆
090-1317-4428

第7展示室
第46回
公募日創展&新院展選抜金沢展

11月12日(土)～13日(日) 会期中無休

丹羽俊夫会長が石川県を基盤として創立し、今年四十六回展を迎えます。

理事長三宅厚史、副理事長今村文男をはじめ、県内外からの出品を中心に日本画一〇〇点余を展覧。また「国際公募 新院展」に出品された秀作も多数展示致します。

◇主な出品者
松尾功一朗・伊藤夏子・中村勝代・大窪昭子・牛丸美代子・北川真理子・北出朝之・保科誠・柴田輝枝・村中博文・南好乃

◇入場無料

◇連絡先 丹羽俊夫 金沢市窪一 二二三

学芸室の人々

学芸員として最初に勤務したのは、開館を控えた七尾美術館です。嶋崎丞前館長が館長を兼務されていました。ある日の朝、七尾駅へ館長を迎えに行く。「等伯の作品が出るぞ」と、車に乗るなり興奮気味におっしゃいます。長く行方不明だった等伯の作品がオークションに出るといいます。あれよあれよという間に購入のための予算措置がなされ、落札。開館記念展で多くお披露目となりました。誰もが入手困難と知る等伯の作品を、開館直前という絶妙なタイミングで自身の手元に引き寄せてしまう力、情報収集力、人脈と人望、そして判断力。そのすべてを目の当たりにし、「すごい方の下で、働くことになったんだ」と緊張するとともに、「学芸員に求められる能力の高さ」にプレッシャーを覚えたことが、今でも懐かしく思い出されます。

村上 尚子(学芸第一課 学芸専門員)

第7展示室 令和4年(2022) 二科会写真部石川支部展

11月30日(水)～12月4日(日) 会期中無休

二科会写真部石川支部の令和4年度「石川支部展」は、石川支部展の写真鑑賞を、より楽しんで戴きたくボリュウムアップをはかりました。
出品点数は石川支部員49名で自由課題 各1点展
+ 今回初挑戦で テーマ作品(北陸の冬)と題して各1点 設けて展示致します。
コロナ禍での第70回二科会写真部本展17名入選者の入選作品も楽しみます。又、会員、会友作品は、創造的写真表現で、二科会写真部全国前線に、並ぶ作品を展示致しました。
石川の写真文化もデジカメ時代となり誰もが手軽に楽しめます。だからこそ、私たちは、写真表現の新しい可能性を追究し続けています。
皆様の、沢山のご高覧を頂き、ご指導ご鞭撻を賜りますようご案内申し上げます。
◇入場無料
◇連絡先 一般社団法人二科会写真部石川支部
土田貴夫方 076-251-0723

第9展示室 一陽会石川支部 WEB展覧会

11月30日(水)～12月4日(日) 会期中無休

今秋、六本木の国立新美術館で開催されました第六十八回一陽展(十月五日～十七日)に出品しました石川県在住・出身作家の絵画・彫刻作品あわせて約30点を展示し、若い世代にも気軽に作品に親しんでもらえるよう二次元バーコードを読み取れば、支部のホームページや作品の解説等もスマホで見れます。
一陽会は「清新にして深奥なるものの創造に勉勵し、新時代の美術を推薦とする。先鋭なる未完成こそ推薦し、前人未到新分野の確立に努力するものである」この精神をふまえ、日々研鑽努力してきた渾身作を展示いたします。美術愛好家の方々に高覧いただいて、ご教示いただければ幸いに存じます。
◇入場無料
◇連絡先 一陽会石川支部副支部長 竹田明男
電話…076-248-5989

11月の行事予定

■土曜講座		午後13時30分～15時 美術館講義室 無料
12日(土)	「仏像は語る4」	
19日(土)	「洋画家たちのフランス」	学芸員 谷岡 彩

《Shelter》しえるたー

180.5×226.0cm
平成7年(1995年)

中島範雄 なかじま・のりお

昭和30年～(1955～)
'95公募日本海美術展

中島が一九九〇年から九五五年にかけて取り組んだ「ノアの方舟」シリーズのうちの一点。同シリーズは、金沢の大野町にある醤油工場が夏の日差しを受けて輝く様子に感動し、工場を方舟に見立てて制作したものです。「思えば方舟は当時苦しんでいた自分であった」と中島は回想します。「自由に静かな場所に行きたい」という思いを方舟に託し、北極や北欧などをイメージした景色の中に浮かべました。そのように穏やかな作風が多い同シリーズの中で、本作は異彩を放っています。

本作では、核戦争によって滅びゆく、決して生きては見ることのできない「美しくも恐ろしい」世界を描きました。人の姿は見えませんが、醤油工場をモデルとしたシェルターを置くことで、その中で肩を寄せ合い懸命に生きる人々がいることも、暗に示しています。今から二十六年前の一九九五年、湾岸戦争も記憶に新しい時期に、第三次世界大戦が起これないようにと祈りを込めました。

勢いのある筆致で赤や青の油彩絵具を塗り、水彩やアクリルの絵具を重ねてはじかせ、それをグラインダーで削り、さらに鉛筆で塗りこめる、という表現は、若く溢れんばかりの気力をキャンバスに閉じ込めているようです。力強さの中にも静謐さを湛えた現在の中島作品とは、また別のエネルギーが凝縮された本作は、第4展示室「優品選」で展示中です。

次回の展覧会

令和4年12月17日(土)
～5年2月5日(日)
会期中無休前田育徳会
尊経閣文庫分館

婚礼調度と遊戯具

第2展示室

千代女と
加賀の俳人たち

第5展示室

特別陳列
メイジ・スタイル
ー石川から世界へー
【近現代工芸】

第3・4・6展示室

優品選
【近現代絵画・彫刻】

第6展示室

書にみる
文字の造形
【近現代書】

1F展示室

かねは雄弁に語りき
ー石川県立美術館の
金属コレクションー
【1/4～2/5】

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
11月7日は第1月曜日より
コレクション展示室無料の日

開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00 年中無休

11月は無休で開館しています

『石川県立美術館だより』に広告を掲載しませんか？

石川県立美術館友の会会員・石川県立美術館協力者・
県内各行政機関及び文化施設・全国の美術館・博物館へ

郵送配布！

2,500部発行

WEBお問合せ
フォームはコチラ

詳しくはお問い合わせください

株式会社ウィット Tel.072-668-3275

〒569-0071 大阪府高槻市城北町1丁目14-17-501

Fax.072-668-3276

株式会社ウィット 検索

HP.https://wi-t.co.jp/

石川県立美術館だより
第469号(毎月発行)
2022年11月1日発行〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL https://www.ishibi.pref.shikawa.jp/石川県立美術館は電源立地地域対策
交付金を活用して運営しています。